

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和二十四年四月二十八日運輸省特別授承認雜誌第三五二號
昭和二十九年六月二十五日印刷
昭和二十九年七月一日發行

第二十卷
七月號

淨土



蓮文

七月號

金魚

一ツ、新宿の料亭の一室で、友人の来るのを待ちながら、獨酌の盃を傾けていると、部屋の隅で、プチ、プチ、プチと音がする。ふと見るとそこに一鉢の容器があつて、金魚が三匹水面に口先を出して空気を吸つている、その音だつた。金魚が音を立てて空気を吸う。私は徒然のままに、ちつとそれに耳を傾けた。

私の父は若い頃、京都の百萬遍で北條辨旭上人に師事した後に、父が東京に寺を持つてからは、上人は上京のたびに、來泊されるのが常だつた。私には覚えはないのだが、後になつて母がきかせてくれた話では、上人は丁度その頃生れた私を膝の上に抱いては、

「坊や、大きくなつたら、御前様に丈けはなるなよ。金魚のように、赤いべべを着て綺麗だけど、きゆうくつでたまらないからなあ」

とよく言われたそうである。緋の色も鮮かに、緑の藻の間を悠々と泳いでいるその姿は、いかにも優美ではあるけれども所詮はせまい鉢からは出られもせず、硝子を通して、人の目を樂しますだけのこと。金魚自身の生活は何處にもない。部屋の一隅に置かれた飾り物。

むしろ、緋・紫・緑と目も彩なるその間に、墨一色の簡素と自由とを樂しみつゝ泳いでいる名も知らぬ小魚の姿こそすがすがしい。

プチプチプチ……。その音をきく乍ら、私は今更のように巷間の隅に、誰にも知られずに、自分丈けの自由を持ち得る幸福を思い、さめた盃に熱い酒をつぐのだつた。(竹中)

浄土 七月號 目次

お中元と盆……………芳賀幸四郎(4)

現代人と佛教……………雲藤義道(20)

私の心を占領しているもの……………村岡花子(6)

波……………佐藤良智(9)

火のいろ……………幸田文(4)

孟蘭盆のころ……………吉田絃二郎(1)

童師を求めた王様……………山田巖雄(18)

戦の後にのこるもの……………(17)

釋尊物語……………山崎宏(27)

いけ花の制作と觀賞……………上田純明(24)

風鈴の音薫る……………鶴田瀧泉(12)

みほとけさま……………佐藤良智詩(26)
松濤基曲

盂蘭盆のころ

吉田 絃二郎



またお盆の月がめぐつて來た。
母と妻とわたくしの三人で盂蘭
盆ごとに迎へ火を焚いてゐたが
今ではわたくし一人が残つて、
迎へ火を焚くことゝなつた。

迎へ火はさびしい裡にも遠い十万億土からわが家の佛
たちが歸つて來られるのだと思ふと、たのしくもあり、
うれしくもあるが。さびしいのは送り火を焚く夜である。
佛を迎へての三日三夜はまことに短かく、佛たちはあ
わたゞしく、ふたゝび遠い旅を淨土へ還つてゆかれる。
秋の夜にすだく蟲の音を聴きながら、燈火のゆらぐ佛
壇の前に坐つてゐれば、佛たちのありし日の聲もさなが
らによみかへつて來る。盂蘭盆會の三夜はありがたいも
のである。

その三夜も所詮は夢であると思へば夢であるがまこと
に美しい夢であり、美しい詩である。

孟蘭盆會はまことに美しい民俗的な詩である。

昨今のやうなあさましい、落ちつきのない世のなかにこれほど美しい生活の夢、生活の詩が他にあらうとは思はれない。

わたくしたちは現實のみに蓋はれてゐるために、夢といひ、詩といへば何の價值も、力もないものゝやうに考へ易い。しかしわたくしたちの祖先がかつて飛鳥川のほとりに打ち建てた伽藍も、大和の丘に築いた寺院も民族的な夢の所産ではなかつたか。

孟蘭盆會はまことに美しい夢である。俗世間のことに追はれて、かへり見るいとまもないわたくしたちの心を驅つて、佛の國に住まはせる三日三夜である。俗人をして詩人たらしめる三日三夜である。

草市はなつかしいものである。

そのころはまだ電氣などは露店にはなく、アセチリン瓦斯や石油の燈であつた。アセチリンは特有の鼻を突くやうな香をたゞよはせ、石油燈はもうもうと煙を立てゝゐたが、馴れるとそれもなつかしい草市の夜の一景物であつた。

子供たちも若い娘たちも老婆たちも、小ざっぱりした浴衣姿に下駄の音も軽やかに草市にあつまつて來た。

子供たちは露を帯びた草花を手にながら、嬉々として草市からかへつて行く。

かれらは亡くなつた兄や妹たちが今夜かへつて來ることをうたがはない。かれらは大人よりも賢いが故に。

わたくしはずつと昔讀んだある外國人の詩を思ひ出す。それは亡くなつたきやうだいの墓の芝生の上で遊んでゐる少年の物語りであつた。古い記憶で、はつきり覚えてゐないが。

大人は子供に問ふ「お前は誰れと遊んでゐるのだ？」
子供は答へる。「墓の下にゐるきやうだいと遊んでゐるんだよ。」

大人は言ふ「墓の下にきやうだいは死んでゐるよ」
子供は答へる。「墓の下にきやうだいは生きてゐるよ。だからぼくはいつもこゝに來てきやうだいと遊ぶんだよ」

夫を失つた女、妻を失つた男、子を失つた親たちも草市の夜だけは子供たちの賢い智慧の世界に生きるであらう。

武藏野の農村にも今は新らしく都會人の家が建てられて昔の習慣は年々にすてられてゆくやうだが、それでも孟蘭盆の十六日の朝武藏野を散歩すれば、こゝかしこの道のかたはらに、胡瓜や茄子の馬が置かれてあつたり、

道の辻々で送り火を焚いた跡を見出すのはありがたい感じがする。そこにも素朴な農民たちの美しい夢があり、童話的な詩がある。

わたくしは三十年も前の夏、岐阜の長良川の長い橋の上で見た精霊送りの夜のことを忘れ得ない。

夜は更けてゐた。一人の女が橋の上から長い糸を伸ばして、手にかゝへた燈籠を川の上に卸した。やがて燈籠は長良川を下つて行つた。合掌して燈籠を送つてゐる女の姿は尊かつた。

またある時わたくしは伊豫の新居濱を訪れた。恰度、孟蘭盆のころであつた。二階からながめてゐると、二人の若い女が宿の庭先の海に蓮の葉の燈籠を浮かべて、合掌しながら、遠ざかりゆく波間の燈籠を送つてゐた。關東あたりから稼ぎに來た女たちだといふことであつたが、宵闇のなかに合掌してゐる姿はあはれに、尊かつた。



火のいろ

寺田 文

一年四季はそれ／＼に季の氣をもつてゐるものだが、夏はなんといつても旺んな氣を孕む季節である。それも七月なかばといえは最も旺んな夏の氣の漲りわたつてゐるときである。そういうときにお盆の行事がおこなわれる。

古くから遺つてきた行事というものは、そのことがらの性質と自然の季節とをまことにうまく結んで成りたつてゐるのがわかる。たとえば奈良のお水取にしても、凍てつく二月であつてこそあの趣を生じるのだし、雛遊びや端午も三月五月というからいゝようなものゝ、汗を流して官女五人囃しはいじる氣にもならなからうし、鯉のぼりも落葉の空にしなびてゐるのではさつぱり意氣があがるまいとおもわれる。心を沈めて亡き人をしのび、想いをひそめて亡き魂たまに供養するお盆の行事が、もの皆の旺んな夏に行われるのはふさわしい。もしこれが爛漫の春、蕭條の秋、沈黙の冬におこなわれるのだつたら、これほど心にしみるものにはならないだろう。

お盆は前日の草市からはじまる。青い眞菰、白い苧殻、色鮮やかな切花のかずかず、野菜果實のいろ／＼を賣る市が立つのだが、並んだ店々からは暑さに蒸さ

お中元と盆

東京教育大學助教授

芳賀幸四郎

また今年も、お盆がめぐつてまいりましたが、そのお盆について、思いつくままに、お話してみたいと存じます。お盆は正しくは、盂蘭盆と申しまして、烏藍婆拏うらんばなという、梵語が、その語源であります。ところで、この烏藍婆拏という語は、苦しみから解放するといふ意味で、佛教の根本精神であります慈悲の一面であります。盂蘭盆會の精神とその儀式や功德を説いた經典が、即ち盂蘭盆經であります。それが、それによりますと、盂蘭盆會はすでにお釋迦さんの時代から、印度で七月十五日に行われていたことが知られます。この日には、各家々で色々の御馳走を用意して、これを僧侶をはじめ廣く人々に供養し、その功德によつて、地獄で苦しんでゐる亡き人々の魂が救われると信ぜられていたのであります。お盆に際して、今日でも方々の寺で、施餓鬼が行われ、家々でも坊さんにお布施や御馳走を出すのは、この昔の面影をとどめてゐるの

れて花のいきれが匂う。祭壇の莊嚴はめい／＼のうちのしきたりで飾つて、さてさつぱりと浴衣にでも着かえる。木綿のさば／＼した肌ざわりのこゝろよさ。晩には苧殻を焚いて佛さまを迎える。これはお盆が果てゝ送るときも同じだが、同じ焚く火でも迎えるを送るとでは火の色がちがう。そこに人情の流れがはつきりとうつゝているのだつた。十三日に焚く火は早く迎えたために、夏の日永の暮れきるのが待ち遠しくて、打ち水をした玄關さきの苔の青さも浴衣の袖の藍もはつきりとまだ明るいうちに焚く火である。火は淡く燃える。それが、十六日の送る火は、送り惜しみ、送りしぶつて、まつ暗になつて焚く火である。ある年、私も遅く火を焚いたあと、なにかそのまゝうちにはいる氣もなく、懇意なうちに大ぶ時が深けて歸る道すがら、そこだけ闇の軒を浮かせてちら／＼と、母親と若い娘と二人だけでそんな遅い火を焚いているのを見た記憶がある。送る火はあかあかと、重く短い焰に燃えて、それでお盆が終る。

終戦から、とにかくにも九年になる。ほとんどひきこもつてゐる私だが、去年、戦後の草市風景が見たくなつて、下町へ出かけた。市とは云えない二三軒が、ともしい花に疵だらけな梨や青葡萄を添えて並べていた。露店や臨時の屋臺は、その筋の指定の場處によるのだから、多分私が知らないのだろうとおもいつゝ、今度は電車通りをすつと續く佛壇佛具屋さんを見て歩いた。見切品に赤札のさがつたのも珍しかつたが、何十萬圓という佛壇にも眼を見張つた。「こういうの、どういふところへ賣れますか？」「東京人は買いません。」主人はふつと私のほうを眺め、「まあ、東京人は買わないようですな」と、ことばをやわらげた。

で七月十五日がお盆にえられましたのは、印度では四月十五日から七月十五日まで、九十日の間、夏安居と申しまして、僧侶たちが寺にこもつたきりで、きびしい修行をする、ならわしになつていました。七月十五日は、この九十日間の修行の終る日で、僧侶たちにとつて、いわば解放の日でありました。それだけに、この日に坊さんたちに供養することは、一しお功德があると、考えられたわけでありましょう。

それはともあれ、盂蘭盆會はもと印度で行われていた、死者の靈魂をまつる、佛教の法會であります。紀元二世紀に佛教が、中國に傳わると間もなく、これも中國に傳わりました。

ところで中國では、一月十五日の上元に對して、七月十五日を中元といい、この日は大切なお祝いの日、一つとされていました。これは勿論、いわゆる舊曆でありますから、朝夕には、すでに初秋らしい爽やかさの感ぜられる頃の、満月の日にあたるわけであります。そして、この中元の祝と、佛教の盂蘭盆會とが、いつしかしだいに、一つに融けあつてしまつたのであります。今日、お盆のことを、お中元ともいふのは、このためでありま

私の心を占領しているもの

村岡花子

もう一年半を越えるのだが、私は毎月佛典に關係のある翻譯をニューエイジという雑誌のためにつづけている。直接佛典と取組んでいるのではないのだが、一八一三年にはじめてアメリカからビルマへ渡つた宣教師ジャドソンという人を扱つた傳記小説を翻譯しているので、自然、佛教に關することがらに多く出會すわけである。

ジャドリン夫妻は大學を卒業すると直ぐ、ビルマへキリスト教の傳道に出ていた。そしてビルマの風物を深く愛した。殊にジャドソンはビルマで初めて接して佛教哲學の深さには強く心を惹かれたようである。原稿用紙八百枚を越えようとするこの長編傳記小説の原作者はアメリカ有数の女流作家で齋藤勇博士編英米文學辭典には、この人について、「女性には珍しい逞しさを持ち、取材の範圍も廣く、屢々米國史上興味ある制度、事件等を題材としている。」と記してある。

このモロウ女史は未發表であつたジャドソンの日記を發見し、これを素材として小説を執筆したので、ビルマに暮した十數年のあいだに彼が佛教から受けた印象がいきいきと描き出されている。

毎號三十枚づつの譯稿を二年近くも書いていると、私の頭の中を絶えず往來す

す。

だが、それでは、この孟蘭盆會がわが國で行われるようになりましたのは、いつ頃からのことでありましょうか。わが國でも、佛教渡來以前すでに、死者の靈魂をまつることが行われていたようですが、それは佛教傳來後いつしか、孟蘭盆會にとけこんでしまいました。日本書紀をみますと、今から約一千四百年ほど前の、推古天皇の御代、ついで齋明天皇の御代に、國家の手で、孟蘭盆會を行つたことが、出ております。殊に、奈良の大佛を作られた、あの聖武天皇の御代から、孟蘭盆會は、國家の、最も重要な年中行事の一つとなり、その後、佛教の普及とともに、社會の各方面に、ひろまつてきました。そして室町時代になりますと、これが更に民衆の間にもひろく普及して、にぎやかに行われ、盆踊りなども盛んになつて參りました。室町時代はお盆の民衆化、という點からみて、注目すべき時代でありました。しかし、十三日から十六日までが、お盆とされ、お盆の行事や飾りなどが、今日みるような形で、ほぼ出來上つたのは、江戸時代になつてからのことでもあります。

孟蘭盆會は、かように、印度におこつて、

るものビルマという國のことであり、また東洋人と西洋人のものの見方の相違と
 いうようなことになる。

この翻譯にかかつてから、私はすいぶんビルマに關する書物をあさつたのだが
 わりあいに資料がすくないので難儀している。

それにしても、初めて東洋の風物に接した西洋人の感懷には中々おもしろいと
 ころがある。一八一三年七月十三日(我が文化十年)の夕暮に近い頃、近海航路の
 老朽船ジョージアナ號はラングーンの港に碇をおろし、アドニラム・ジャドソンと
 その妻アンはビルマへ到着したのだ。アンは二十一、アドニラムは二十五だつた。

モロウ女史の畫く船中からジャドソンが初めて見たラングーンを、私たちも偲
 んでみよう――

「雨季にはいつていたので、西南風の吹き降りが終日河べりの紅樹と、既に水び
 たしになつてゐるそのへん一帯の平野の上に打ちつけていた。何時間も何時間も
 アドニラムはここに文化の表情を見出だそうとして立ちつくしたが、やつと正午
 になつて答を得た。

北の空の雲間に金色の直線がゆらぎ出た。ほんの一瞬間で、たちまち薄むらさ
 きのもやに包まれてしまつた。その午後じゆう折々見えかくれしたが、ジョージ
 アナ號が碇をおろした今、漸くその全貌をつかみ得たのだ。雲は全くあがり夕日
 は稻田一面を照らした。アドニラムは聲も出ないほど驚嘆した。

青い山から北の方にすばらしく均整のとれた黄金の尖塔が聳えていた。木々の
 間から出るところは丸く眞紅の空にふれるあたりは細くとがつていく。」

中國をへ、更にわが國に傳わり、しかも長い時
 代の間に――普及し、今日に傳わつたもので
 ありますが、それは、佛教の慈悲の精神の、
 あらわれとして、深い意味をもつた行事であ
 ります。また十三日の晩に焚く、あの迎え火
 をうたつた、「迎え火や父の佛母の顔」とい
 う、古人の俳句がありますが、お盆は人情の
 自然に根ざした、まことに、うるわしくも、
 なつかしい習俗であります。

生活がどんなに合理化されようとも、いつ
 までも、私たちの生活のなかに、のこしてお
 きたいものであります。しかし近頃、特に都
 會では、お盆の眞精神が忘れられ、單なる社
 交上の、贈答の機會として、「お中元」の意
 味だけに理解され、農村でも、享樂的な盆踊
 りの面だけで、持たれる傾きのありますこと
 は、残念なことでもあります。亡き人々の靈魂
 が、お盆を機會に戻つてくるということとは、
 科學的には、信じがたいことだとしても
 せめてお盆の機會に、ふだん、ともすれば忘
 れがちな、亡き人々を想いおこし、祖先の苦
 勞をしのんで感謝し、責任感を新たにするこ
 とは、私たちの生活をゆたかにし、深める上
 に、大へんよいことではないか、と存じま
 す。(N・H・Kより放送)

お盆に開く我が心

七月の十三日の早朝、棚經に來られた僧形を見て、あわてゝ花を買ひに走つたり、木魚を直して、ほこりを手で拭ふやら、大慌てをする人がある。それほど私共は世智がらいやりとりの世間に、ギリ



ギリまで追いまくられてゐるとも言へませう。

しかし、目で見たり、そろばんできちんと弾き出せるだけの世渡りでは、甚だ心細い生き方であります。

横へ廣く深く目を開いてよくみると、無形の大きな恩に包まれてゐることがわかります。横にずつと考へて行きますと、先祖—それは個人々々のだけでなく私共みな先祖の力が私に凝つて生れてゐるのを氣付きます。

恩と云ふ言葉は、近頃少々薄らぐやうな社會環境であつて心もとないのですが、恩の心から、自分だけでなく人間全體を考へていくヒューマニズムの心ともなるのです。自分は笑つていても、どこかの人は泣き、孤獨に悲しんでゐるかも知れない。自分は今、幸に生きてゐるが、先祖はどうであつたか、という反省が菩提追善に、この誠を捧げたいという氣持にもなるし、又、追善から、こうした人としての反省にも恵まれる。

お盆は、こうしたよい時機であります。おせがきは、施し、即ち求めるものに、己が少きをわけてやるといふ慈悲、自分以外の人を考へるといふ尊い心を生む事を考へたい。ふだん見えない世間と人々とに佛心を持ちたいものであります。(寫眞は、ハスの博士東大教授大賀一郎氏發見の二千年前の蓮の實が栽培されて見事つばみを持つた珍しいもの。)



波

——波は揚りて無量なり——無量壽經

佐藤良智

夏は水が戀しい。人間と水。人間の發生から水には縁が深い。幾万年も前のことはわからない。しかし、人間は宿命として水なくしては生きられない。水は有難い。まなつの一杯の水。かんろ。甘露。一大詩集でもある佛典が、水を讃え、水によつて眞實をあらわそうとこゝろみていることがしばしばある。わたしの好きな佛典の句に「波はあく實相の音」というのがある。

日本人は池を好むらしい。——いや、日本人ばかりではないかも知れないが——。少し庭でもあると池を造つて楽しむ。名苑には必ず池がある。龍安寺でも、あの砂は水であろう。お浄土にも池がある。寶の池だ。随分、清らかで美しいらしい。水は満々として溢えられていて香潔だといふのだから、香るが如く淨らかなのだろう。口に掬めば、かんろのようにおいしい。明治神宮苑に舊浦をみに行つた時、緑の林の奥まつたところに、清正の井戸というのがある。低い井戸わくから、靜かに清水があふれているのだが、ほんとうに、

とろりとした、香るように清く美しかった。お浄土の八功德水とは、もつときれいなのかな。寶池には色々あつて、七つの寶の池があるというのだ。水精の池。瑠璃の沙が底の方に光つていふという。紫金の池というのには白玉の砂がきらめいている。名をきくだけでもわくわくするようだ。この池には、紅や白の水蓮が咲いている。これを神宮苑の池に、やはり、紅や黄の水蓮が靜にさいていたが、あの池ももとは井伊家の下家敷のものだつたというから落ついていて緑の木にかこまれ美しかった。白い水蓮は原語で分陀利華(Pundarikā)というのだが、佛典に、信心深い尊い人を「人中の分陀利華といふ」と言っているが、「一莖不染」けがれにそまない清らかさをよく表現していると、泌々思つた。

池の汀には、せんだんという、香樹がほのかに香つていふと、かいてあるが、なにか、すうつと香つてきて、心が淨まるこゝろもちがする。自然は、よき香り、というようなものをよく造つたもの

だ。極樂のせんだん樹はさぞかしよい香りであろう。この香りを心に念ずるだけでも邪の心が消え去つてゆくような氣がする。この池の水をからだにそゝげば、たましいを開き、心垢を除くという。神社では、参拜前、身口をそゝぐ形式があるが、實際、清らかな水をそゝげば、閉じたこゝろをひらき、こゝろの垢を除くような氣がしよう。佛徒にも、もちろん水を灌ぐ形式がある。お風呂に入る時も、こゝろまでも清めんと念じて、誦する法句がある。形式だけでなく、日常の入浴にもそのこゝろがけをもちたいものだ。明るい現代的な誦句でもあれば理想的なのだが。

この實地に小波がたつている。「波は揚りて無量なり」と記している。わたくしは今、この小波の聲をきいてみたい。「波」という題も、實はこの「波の聲」の意味なのだ。極樂に生れたものは、その願ふところの聲がきこえるという。「自然の妙なる聲」に耳を澄ませて聞いてみよう。さとれるもの（ぶつ陀）の聲がきこえる。机の前に坐つて、食卓の前に坐して、眞實をふみ行つた者の眞實に聲をきゝ得るものは仕合せだ。法の聲がきこえる。眞理の聲だ。眞理はあるか。佛陀が眞理であると説かれた眞理はたしかにある。僧の聲。本當の社會（和合僧）の聲だ。理想の社會の聲だ。個人の聲ではない。社會の波をこぐつてきこえてくる本當の社會の聲だ。この聲をきゝ落してはならない。寂靜の聲。靜かな聲。これはいつたいどんな聲なのか。眞實な世界のこえ。（ねはんの聲）。わたしは、ねはん

とは、生命のみちみち、いのちの極まれるものそのものと思ふ。力に満ち、ひかりに満てるものそのものと思ふ。内側から、あらゆるものを生かし、内側からあらゆるものを光あらしめるもの、それがねはんであると思ふ。聲のない聲だ。無聲の聲だ。それ故に寂靜である。この靜かにして、實は、大音聲であるこのこえをきくものは幸あるものかな。空無我の聲がきこえるという。これも寂靜の聲、すなわち、ねはんの聲の別なひびきだ。力に満ち、光りに満てるものの中には、定まつたすがたはない。強いて言へば空だ。しかし何もないという空ではなく、反對にすべてであるという空なのだ。幾度かつきあたつてこまるのはこの空の一字だ。空の字が悪い。しかし、外にあらわしようがないから仕方なく用いるのだ。色で言えば「白」である。あの白に美わしく天空を彩る紅の七色がひそんでいゝる。空は白に相當する。青色青光・黄色黄光・赤色赤光、白色白光。（あみだ經）結べば白一色。開けばかぎりない色。その一々が、一々の光りを放つのである。空はかぎりない一切の事物となつて光りを放つてゐる。空とはそのようなものである。無我とても同じである。力にみち、光りにみちてるそのものは、我と名づけられるものがない。それ故に、また、内側からすべてを我ならしめてゐるのである。あなたも我。私も我。しかし、よくよくみれば、あなたも、わたしも、生かされて生き、照らされて生きているのだ。この聲を。この聲を耳をすませてきかんかな。

大慈悲の聲。ぢひの聲。この聲をきけば涙ながるゝ。人の世に、けわしき、もろき、人の世に、ぢひの聲鳴りひびくが故に、人は救れる。平和も愛もこのぢひの聲がきこえるからこそ地上にあるのだ。この聲がきこえなくなつた時、地上はぢごくだ。ねはんの殿堂からなりひびいてくるこの聲をきかないものが、いかに平和の鐘をうちならしても人のこゝろの奥底にはとどかないであらう。そしてまたこの聲は、地上から一人も苦しめる者が無くなる迄、きゝ續けなければならぬであらう。

次には、ばらみたの聲。生と死と。人の世の河は流れに流れてひと時もやまない。生れては死に。死んでは生れる。流れ轉ずることは人もものも區別がない。生死の河にあつて生死を超える者。それはこの、ばらみたの聲をきくものにこそ訪れる。この聲をきくものは、こゝろゆたかに施しの徳を知り、身をつゝしみ、忍ぶこと強く精進かぎりなく、こゝろ動ずるところなく、智慧豊かなれと願い、行ふものとならう。六度という。度は渡ることだ。渡れわたれ。生も死も一つに包んで渡れ。そのように小波は聲をたてゝいる。

まだまだきこえる。十力・四むい・不共法の聲だ。十力とは智慧の力だ。佛法はなによりも智慧を大切にする。そして智慧は力であると言う。まことに智慧は力であつて、この力がなければ文化はすゝまない。佛教は文化教だ。ちえの力に支えられた文化こそは死なない文化だ。何物をも極まれるところまで知る智力。人格の完成も

亦この智力によらなければならない。惡のかけらに至るまで除く智力。十に分つてゐるが智力は無限だ。智力の聲がする。淺草の觀音さまの御拜に「施無畏」の額のあつたことを記憶される方はあまりないことでしょう。かんのんぼさつは、「をそれることのない力を施してください」と言ふのである。自分自身に對しても、社會に對しても畏れを知らないものとなれば、その人は強い。正義がその人を支配していなければ畏れを知らないものとはなりがたい。況んや、正しきを人に向つて説くと言うようなとき畏れてならない。法然上人が、心は高く、身は低くと申されたのもそれであらう。正しさを貫く。それには無畏でなければならぬ。無畏は尊ばなければならない。

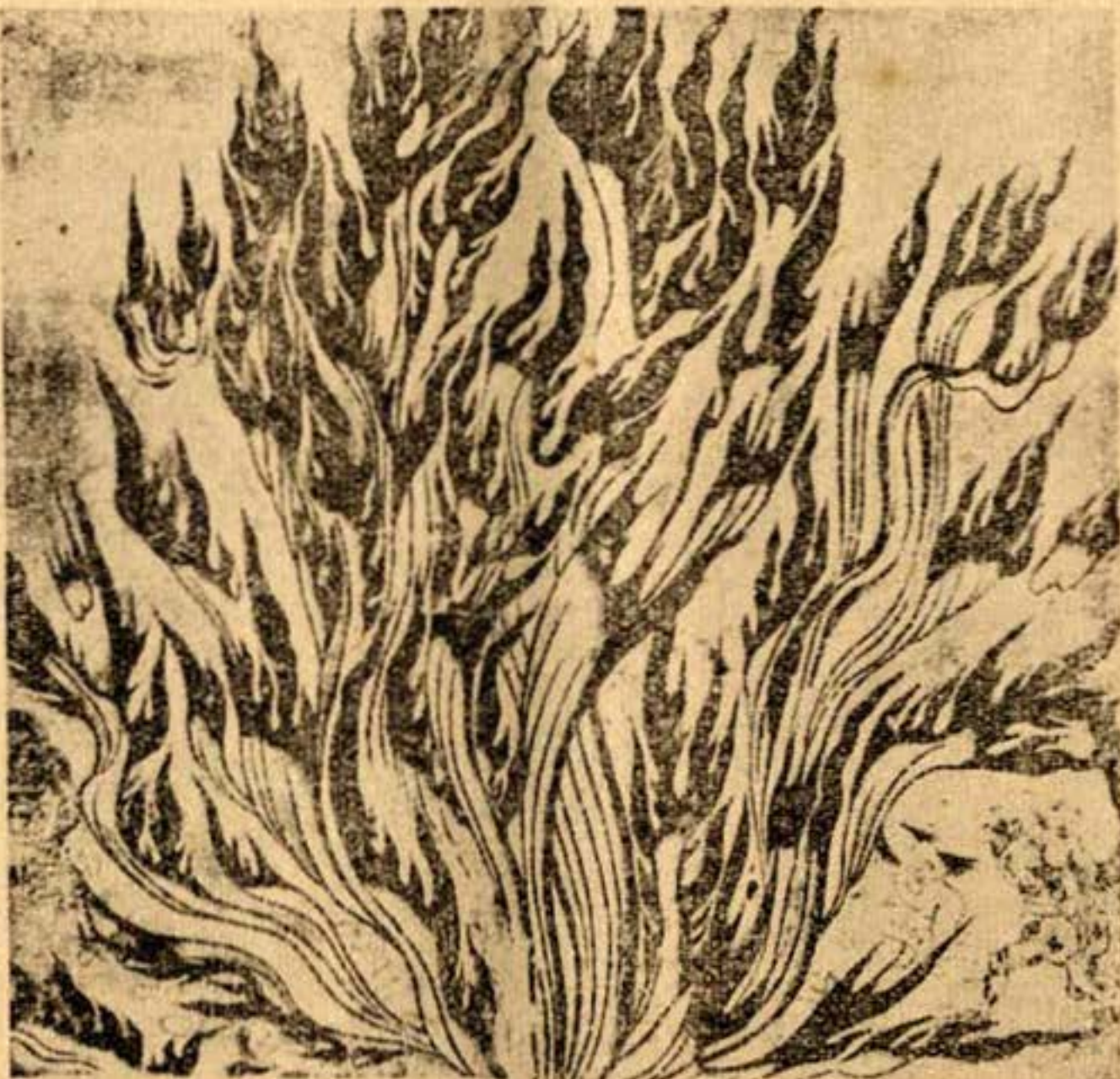
釋尊は十八の特別の徳をもつていられたという。さとれる人、佛陀が人並すぐれた力をもつていられたことは想像に難くはない。身にも口にも、こゝろにも缺くところがなく、健全なこゝろであつて、旺盛な意欲のもち主で、常々精進に熾え、智慧に退轉なく、自ら達し給へる無限の自由を發揮したまい、からだ、ことば、こゝろ常に智性に貫かれ行動され、過去を、現在を、未來を徹して知られてさえられることがなかつたという。このような、十力・四無畏・不共の尊い聖なるこえがきかれる。尊きかな。

もろもろの勝れた慧の聲。天眼等の六神通。神通はもちろん不思議の力である。しかし、佛法に奇跡はない。人間にそなわる肉體

力、精神力の最大限に發揮されたのが神通である。人間はその授けられた力を充分に發揮するのと、しないのでは異なる。充分のぼしきらないものから、のぼしきつたものをみれば、奇跡にみえ、神通にみえるのではないか。その第六は漏盡通。すなわち、惡しきころの完全になくなつたころがあれば、そのころの力は超人にみえるに違いない。神通にちがいない。この神通が慧なのである。これが慧い。その次にきこえる聲は、無所作の聲と不起滅の聲である。

佛法の教えるところは高きに至れば人智の盡くるところの感が深い。幽玄とでも言ふべきでしようか。あまりに高く、時に、大地を忘れはしないかとあやぶむ。しかし、行くところまでゆきつくさずにいないというのが佛法である。この二つの聲も、その境地の聲である。法自然の平等の世界に達すれば、行ふべき修行もなく、起すべき善も、滅すべき惡もない。雲は行き、水は流れる。たゞありのままのすがた。これが、なすところなく、起滅のない境地だ。その次にきこえる、無生忍の聲も同じである。生もなく滅もない。目の前に生とみ、目の前に滅とみえるのは假のすがたにすぎない。たゞ、空のみである。しかし、前にものべたように、この空は、内側からみれば、すべての生、すべての滅を貫いて、法爾自然の大音聲となつてなりひびいているのである。それ故に、寶池の波となつてきこえるのである。このこえは、ピアノのキーで言へば、あの一番

高いキンキンする聲にでもたとえようか。ともすれば聴域を越えるであろう。しかし、清らかな寶池の波の音にはちがいない。これらのもろもろの聲を、心の耳をすませてわたしたちはききたい。無量にあがる眞理の波の音。(大正大學教授)



地獄草紙(第三段雲火霧處の圖) 小島章見氏提供、同氏六月號記事
参照獄吏に追われる亡者の姿が右下に見られる。

風鈴の音薫る

鶴田湛泉



合掌底頭するのだった。

今度は四十八日間の念佛會を修する事となつてゐたが、行事も醇熟した十八日目の夜の事である。

「あつ、あの火」

誰かゞ、何かに驚いたやうに叫んだ。

この道場は世に相國堂と呼ばれ、二條院姫君と稱された隆信朝臣の娘で、厚い念佛信者である藤原宗通の未亡人の建立にかかるものであつた。

今日も、空阿の選んだ四十八人の聲のよき者が誦する六時禮讃の微妙な階調は、聞く者の心を打ち、隨喜の涙をさそつてゐた。

殊に彼が、念佛勸化の終に、

「念佛つとむれば淨土に蓮ぞ生ずなる。一生つねに退せねば、このはなかへりてむかふなり、一世の勤修は須叟の程、衆事をなげすてねがふべし、ねがはゞかならずむまれなむ、ゆめくをこたる事なかれ」

と唱へると、皆合掌底頭し、彼によつて生活が念佛によつて意味づけられる事を教へられ、大きな感動を催して

九條油小路の念佛道場では、空阿が指導者となつてしばし念佛會が催されてゐた。そんな時、いつも堂は雲集する貴賤の信者で満ちあふれてゐた。

指した戸外を見ると、はるか彼方に明松の火が點々と動いてゐる。隊伍を組んだやうな明松の光、一團となつて動く火、黒々とした闇に朱を滲ませたやうに動いてゐる。

正しくこゝへ向つて来るやうに思はれる。

「おゝ火が見える、あの火は只事でない」と一人が怪んで云ふ。

「追手だ」

「山門の惡僧共の來襲だ」

皆の顔色が、サツと蒼白に變つた。

スワと總立になつた。

事態の重大な事を感じたからであつた。

二

日頃こゝで毎月のやうに念佛會が行はれ、多くの念佛信者の集つて来るのに、羨望と嫉妬の念を抱いたのは山門の衆であつた。殊に空阿の隆盛なる教化を憎んでゐた。

彼は貴顯の信者をもち、多數の檀越に擁せられて、彼の在る處、貴賤結縁のため競ふて集つて來た。彼の動く處、信者は雲集し、まるで徒黨を結んでゐるかのやうに思はれた。で、山徒は日頃から彼の動きに注目し、その鬱憤はいよゝゝ高まつてゐた。

彼の處分方を、仙洞へ訴へ出たが、何の禁止の令も出ないのに、業を煮した山門の衆は、この上は空阿の活動を妨害する舉に出るかも知れないとの風聞がしきりに傳つてゐた。

空阿の方でも山門の動きに内心怖えてゐたのも蔽ふべくもなかつた。

今、その豫期してゐた事が終に來たと直感し、正しく山徒に取り圍まれ、彼等が、今にもこゝへ殺到して来るかと思つた。

まるで山門の激昂が、焰となつてなだれて来るやうに思へた。今までの物靜かな聖寂な宗教的な雰囲気は一瞬に壞された。

叫喚と悲鳴が捲き起つた。

「逃げろ」と誰かが叫ぶと、

縛め捕られては大變と、蜂の集をつゝいたやうになつて、我がちに逃げ、轉げまどろうものもゐた。

或者は、佛像を抱き、或る者は黒衣を懷にして闇にまぎれて、再會を約しつゝ退散してしまつた。

が空阿のみは、逃げ去らうともせず泰然として、上人の畫像の前で念佛を稱へてゐた。

山徒が一舉にして、こゝへ迫つて來た時には、早や藻抜けの殻とくやしがつたか、

そうではなかつた。

混亂をきはめたその翌朝になると、それは誤傳であつた事が分つた。

それは、鳥羽殿へ行幸の明松の光であつた事が明らかになると、餘りにあわてゝ取りみだした自分達の態度に、彼等は苦笑を禁じ得なかつた。

法然上人の教を守つて、一寺一坊を造立することもなく、と云つて別に教團的な形式を調へることなく、天地を一字の道場としての氣宇を以つて、その往くところ接するところにまかせて、自行化他念佛を弘めてゐたものも多くあつたが、とりわけ空阿は、さうした行者の雄であり、貴顯の間に歸崇を博してゐた。

叡山にあつた彼は、上人の名を慕つて吉水の庵を訪れ、念佛の教を聞いて後は、經をも讀まず、禮讃も誦へずたゞ稱名を唱へるばかりで、京洛を周遊して淨土の教を衆にすゝめ、一定の住家も持たずつねに諸所に移り棲み、縁を求めてひとの道場をすみかとしてゐた。沐浴便利のほか衣を脱がないと云ふ程、敬虔な道心堅固さであつた。

師の上人は、日頃弟子達に、

「源空は智德をもつて人を教化してゐるが未だ十分でない。ところが法性寺の空阿は愚痴ではあるが念佛の大先達として、化導あまねくひろく行つてゐる。自分が若し再び人身を受けたならば、大愚痴の身となつて、空阿のやうな念佛勤行の人とならう」

と、口癖のやうに云つてゐる程、空阿の行德を讚美してゐた。

一方空阿も、上人をまるで生佛のやうに崇敬してゐて、右京權太夫隆信の子在京太夫信實朝臣に畫いて貰つた上人の尊影を、一生の御本尊として崇んでゐた。

空阿は風鈴を愛翫してゐて、いつも懷にもつてゐたが、いたる處

ごとにそれをかけては、微風に鳴る爽かなる風鈴の音をきいて樂んでゐた。あたかも極樂の七重寶樹の妙香をかぎ、そよ吹く風の妙音の響をきく思ひをよせてゐたのだつた。魂の底まで淨土を憶れてゐた多感な彼は、南無極樂世界と稱へて涙ぐんでゐた。それは、風鈴の音の中に身も心もとけこんだ全く甘美な陶醉しきつた涙であつた。

彼は淨土からの如來の無碍光に照らされてゐる思ひして、念佛しつゝある態度は、たゞ佛のみ聲を聞いてゐるとさへ思つた。無智、不正、不幸にみちゝたこの人生を越へた清淨な淨妙樂土と憶れ、如來の大悲に、こみあげて來る喜びに泣く涙であつた。

彼の行狀は、あくまで清白で簡素で、或る書に、

（行德人にしられ名望世にかうぶらしむる。尊貴なりといへども、面をむかふれば崇敬し、智者なりといへども、口をひらけば悉く伏膺せしむ）

と云つてゐる程、彼の教化力は人並すぐれてゐた。實際、彼は萬人を引きつけずにはをかないやうな魅力的な行者であつたらしい。

四

すぐる建永二年の春、專修念佛禁止の宣旨が下り、上人の遠流となつて、それから數年後、上人の示寂を見たので、南都北嶺の舊佛敎側は、念佛の敎は自然に挫折するものと樂觀してゐたが、豈計らんや、念佛の敎は却つて日と共に益々勢を加へ、弟子達も筆に口に宗義を宣揚したので、その實踐上下に及んで、敎線はますます伸張

するに至つた。

殊に、その頃上流の子女の間に念佛勸化を聞いて、念佛宗に歸するものが頗る多くなり、喜びの餘り尼となる女性も少くはなかつた。左中將伊時朝臣の妻も出家して尼となつて、世間の耳目をおどろかした。

が、念佛の教線の伸びると共に、又これに對する嫉妬排斥の感情も昂つてゐた。天下の姪女競いて尼の形を假りて狂僧に扈從し、念佛にことよせて風俗を紊すと、事實らしく惡宣傳して誹謗するものも現はれた。

念佛門に對する彈壓迫害は次第に加はり、且つくり返へされて來た。

今列擧すると、

建保七年二月四日、嵯峨清凉寺に念佛の徒の禁止の院宣が下り、更に八日には、宣旨を僧綱に下して、諸寺に觸れて念佛の輩を糾彈せしめた。

貞應三年五月十七日には、延曆寺から六ヶ條の篇目を掲げて、一向專修の亂行の停止を請ふてゐた。

かうして再三念佛嚴禁に狂奔した山門の憤激の程が想像される。日頃たへず勢力競ひをし、紛争を引き起してゐる山門と南都との間柄でさへ、念佛停止に對しては、共同戦線を張つて來てゐたのは云ふまでもない。

行徳世間に吹聴され、衆を跪伏せしめるほどの魅力のあつた空阿に對しての憎惡は、特に甚だしかつたのか、遂に彼は京外に追放を

命じられてしまつた。

五

山徒の訴へによつて京外に放逐された空阿の消息は一時不明になつてゐたが、天王寺あたりで潜かに念佛勸化に従つてゐることが分つた。嘉祿元年三月、入道相國前大政大臣の招きによつて入洛し、中山に於て盛大な迎講を修した。

その日、彼の徳を慕つて天下の貴賤尼女群衆し、各々珍膳を捧げて供養し、玉を飾り花を結んで風流を極めた。

列座してゐた多數の公卿は、日頃たしなんである得意な管絃を調べ、六時禮讃と和して奏樂が春の夜に洩れ聞えたと云ふ。

念佛禁止下にあつても、彼に對しては、かうした致請があり供養が行はれてゐた程の尊崇が集つてゐた。

念佛禁止の實効が容易に擧らなかつたので、山徒の怒潮々嗽々、諸宗に相觸れ、全佛教諸宗の應援協力を求めて彈壓に乗り出して來た。山徒相集り、この上は七社の神輿を振るべしと密議し、念佛門の惡口を吐き、いよく暴を加へ、半狂亂の相を呈して來た。

專修念佛巨頭を追放すべしとの爪牙を咬み鳴らした結果、安貞二年七月七日、念佛敎團の主謀者として、空阿は薩摩に、隆寛は陸奥に、成覺は壹岐に流罪、餘黨は悉く其の在所を尋ね搜して永く都を追放すべしとの宣が下された。

が、諸宗からの執拗なる迫害彈壓運動がくり弘げられたにもかゝらず、念佛停止の禁令を潜り、迫害を克服し、地表の下を這ふ根から根をひろげるやうに、念佛の敎はますます歸向者を得て、全國的に教線を擴張して行つたのだつた。

戦の後にのこるもの

—「山河遙なり」—

映

畫

戦いの後には色々なものが残る。廢墟、飢餓、不倫、頽廢等々。そして人間は、不具となり、未亡人となり、孤兒となる。こうした悲惨の外、果して何が残るのであろうか。そして、譬え勝利者となつたとしても。

この映畫も亦、こうした悲惨の一つを、孤兒達の中に見い出した。荒野を放浪する孤兒の群。父や母に、或は死に、或は生きながら別れた子供達が、最の權利である高らかで自由な笑いさえ忘れて、たゞ敗殘兵の死の行進のごとく續く。善意の人間に對してさえ、恐怖を感じ、好意の手さえも、惡魔の手と見る。蝕ばまれた子供達の心の底には、何の光りもない。

こんなときに、一人の人間愛を持つた主人公が現われる。勿論彼も亦、惡魔の如く見られる。そこでは、二人の根氣比べが始まる。しかし、勝利は、彼の温情がものにした。子

供は完全に、彼の子となつた。そのうち、やがて子供は、自分に母のあつた事を思い出し、母を探す。母も亦、子を求めて、長い旅をつゞける。そして、最後には、二人の切なる願ひは、現實となつて救われて行く。

此處に描かれた一つの話は、戦の後にのこつた數多いものの一つである。そして、こゝでは、幸いにして、人間愛が最後の勝利を得て、目出度く話は終つて行く。たとえ、荒廢の中であつても、若しこの人間愛の勝利がすべてであるならば、これに越した喜びはない。が、よく考えて見ると、これは大吉に終つた涙ぐましい物語であり、幸福物語でさえある。しかし、この裏には、これ以上の悲惨が、數多い人々に依つて、體驗されている。

平時に於てさえ、父や母を失つた子供の心は、永久に暗い影を止めて行く。況して、あの戦火の中で、無慘に先立つて行つた父母達を持つ子供の心底には一體何が殘されたであらうか。そして、そうしたものを宿した子供

達が大きくなつたとき、果して彼等は何を考へ、何を行うことであらうか。一度浸み込まされた青黒い汚點は、必ずや何物かを殘さずには置かぬであらう。

それでも、人間の片隅には善意がある。魔性に取りつかれた極惡人でも、善意がある。この善意は、時のはずみに大きな輝きを放つ。況してや、より以上の善意を持つてゐるであらう人々の中に於て、こうした悲惨が悲惨としてのみ放置される筈がない。もし、これを看過し得るとしたならば、それは人間としては、墮落であり、敗退であらう。そして、この映畫はこの善意を最大限にとらえて居る。



童話 師を求めた王様



山田 巖 雄

むかし、大へん賢い王様がありました。ある日家來を五六人呼びよせて、

「お前たちは手分けをして國々を廻つて、私が教を仰ぐ立派なお坊さんを探がしてきてくれ。」
とおいいつけになりました。

家來たちはすぐに旅の仕度をして、四方に出かけて行きました。

やがて、一人、二人と歸つてまいりました。

甲「王様、私が行つた國に、大へん立派なお坊さんがいました。何日も何日も斷食をしたり、凍りつくような寒中に瀧に打たれたり、他の者には出来ないような、苦しい修行を平氣でするお坊さんをつれてまいりました。」
「そうか、いつしよにつれてまいつたか。ごくろうだつた。」

王様はそのお坊さんをしていねいに御供養しただけで、歸しました。

次の家來は、

乙「私はどんな病氣でも治ほすし、未來の出來事を豫言することが出来る大へんえらいお坊さんを探してきました。すぐここへつれてまいりましょうか。」

と申しました。王様は

「ごくろうであつた。」

とおつしやつただけで、そのお坊さんをつれて来るようにとは、いつまでたつても、おつしやいませんでした。

東へ行つた家來が歸つてきました。

丙「私の行つた國に大へん學問のよく出来るお坊さんが居ります。若い時から勉強をつゞけていて、どんなお經でも、どんな教でも、知つて居るそうです。」

王様「ごくろうであつた。ではお前はそのお坊さんに、これ／＼のことを聞いてきてもらいたい。」

と、二つ三つむづかしいことを、聞きにやりました。家來はすぐにその譯を聞いて歸つてきて、王様に申し上げました。

王様はていねいにお禮の品物を持たせておやりになりましたが、別にそのお坊さんをお城へ呼び迎えようとはなさいませんでした。

南の國へ行つた家來が歸つてきて申しました。

丁「私は大へん立派なお坊さんを見つけてまいりました。そのお方は一日中暇さえあれば佛さまの前でお經を讀んでいます。大へん佛さまをうやまつていますので、たくさんの人がそのお坊さんをうやまつております。」

王様は

「ごくろうであつた。それではお前はこれから行つて、そのお坊さんに御先祖の御回向をお頼みしてきておくれ。」

お布施を持たせておやりになりましたが、やつぱりお城へ迎えようとはなさいませんでした。

北へ行つた家來も歸つてきました。

戊「私のまいりました國にいるお坊さんこそ師と仰ぐべき人だと存じます。そのお坊さんは人々を助けるために道をなおしたり、橋をかけ直したり、困つてゐる人を助けたりして人のために盡しています。」

王様「ごくろうであつた。そのお坊さんは、私たちがやらなければならぬ仕事の足りない所を手傳つていくれるのだな、ありがたいことだ。ではお前はそのお坊さんのなさることを助けてあげるために、私からだといつて、このお金をとどけておくれ。」

すぐにたくさんのお金を持たせておやりになりました。けれどもやつぱり、お城へお迎えにはなりませんで

した。

最後に西の國から歸つてきた家來が、

戊「西の國に居りました一番尊い坊さんは、いつもたくさんの人に向つて、『佛さまに守られて正しく暮らしなさい。』と教えています。いろ／＼な商賣の人が教を聞きにまいりますが、いつでも、その人たちに『佛さまを信じて佛さまのみ名を唱えてさえいれば、佛さまは必ず守つて下さる。だから安心して、正しく、明るく、仲よく暮らしなさい。悪いことはしてはいけませんぞ。誰一人知らないと思つても、佛さまは御存じぢや。誰一人知らなくても、よいことをすれば佛さまが見ていて下さる。めい／＼心を淨よくすることを心掛けて、自分のしなればならない仕事に精を出しなさい。それが世のため、人のために役立つことぢや。』と教えて居ります。このお坊さんほどたくさんの人にうやまわれているお方を聞いたことはございません。」

王様はうなづいて申されました。

「そのお坊さんこそ私が師と仰いで、教を受けるべきお方だ。ごくろうだがこれから行つてそのお坊さんをお迎えしてきてくれ。」

この國は、大へんよく治まつて、長く榮えたと申しま

現代人と佛教

——中山文化研究所の宗教講座について——

雲 藤 義 道



中山文化研究所の宗教講座について何か書く様
にとの御注文である。しかも、併せて現代の佛教
についての感想をも述べよとのことであるが、果
して私にその資格があるかどうか、甚だ自信がな
い。こういうことは、當事者が語るよりは、却つて、外部からの觀
察の方が正當を得ている場合が多い。誰か他の方に語つて貰つた方
がよさそうに思われるが、手前味噌になることをお許し願つて、若
干の紹介と感想を述べさせて頂くことにする。

中山文化研究所は、大正十三年一月、即ち關東大震災の翌年、大
阪において中山太陽堂社長中山太一氏の念願によつて創立されたも

のである。大正十五年に東京に進出、文學博士であり、また醫學博
士であつた富士川游氏が初代所長に就任され、「内的には精神生活
の理想信念を確立し、外的には科學知識の理解應用により、善美な
る家庭と社會の實理に資せん」との創立趣旨に従つて、とくに、宗
教と科學との融和統合のために、多くの功績を残された。富士川所
長を中心とする毎月の佛教講座の外に、全国各地を巡回して、迷信
打破の啓蒙運動が行われた。當時の詳しい状況は、今述べる必要も
ないことであるが、その感化は、今日に至つてもなお、思われぬこ
ろに残つてゐる。

昭和十五年秋、富士川博士の逝去に伴つて、第二代所長として、
佛教學界の長老たる高楠順次郎博士が迎えられ、爾來、東西哲學思
想の比較融合のための研究活動に主力が注がれた。現在では、佛教

學界の重鎮として活躍して居られる、結城令聞博士や三枝博音博士等が、その研究活動の中心となつて、高楠博士の指導の下に、貴重な研究が續けられたが、戦争のために、遂に、その成果を世に公表するに至らなかつた。昭和二十年、高楠所長の逝去により、かつは、終戦前後の苛烈なる環境の下に、當研究所も一時閉鎖のやむなきに至つた。

然るに、戦後の世相急轉に伴つて、宗教心の缺如と人心の頹廢の甚しい情勢を憂えた中山所主は、經濟的苦境を押して、創立本來の趣旨達成のために、研究所の再開を決意し、昭和二十四年二月、新たな構想によつて、再發足することになつた。刑法學の權威でありかつ熱心な佛教研究家たる小野清一郎博士が第三代所長に就任され、また、元日本女子大學學長井上秀女史が顧問として婦人部の指導に當られ、毎月、宗教文化講座、婦人文化講座、親鸞研究講座を開催し、宗教研究會、家政研究會、育兒研究會、青年心理研究會等の研究活動と共に今日に至つてゐる。

以上が中山文化研究所の沿革であるが、現在の事業の中心は、いふまでもなく、その講座活動にある。就中、中山文化研究所の特色を發揮しているのは宗教講座である。おそらく、編輯者の御注文の意圖もその點にあると思われるので、以下少しく、宗教講座の状況をお知らせして参考に供し度いとおもう。

二

宗教講座を始めたのは、昭和二十四年三月であつた。當時は戦後

の社會混亂の眞唯中であり、一方において、キリスト教の積極的な傳導が展開されていた。かかる折に、東京のような大都會の眞中で佛教講座を開いて、果して人が集るであろうかということに、少なぬ危懼の念が懷かれたが、結果は意外であつた。再開以來今日まで、一回も休むことなく、既に一三二回の宗教講座を續けて來たが回を遡うごとにいよいよ盛況を加えている。今では、僅か二百人足らずの狭い講堂であるが、ほとんど満員にならないことはない。多數の人が佇立して聴講して居られることも珍らしくない。時には講堂に這入り切れず、空しく歸られる人もある。聴講者にはまことに氣の毒であるが、いかに工夫して見ても、聴講希望者の數が講堂の收容能力をはるかに超えているのである。このような状況は、他の佛教講演會では珍らしいことであらう。

かように、中山文化研究所の宗教講座が、少しでも世の注目を浴びているということはどういうことであらうか。確かに毎月の講座は盛況である。しかし、狭い講堂に多くの人が集るということだけならば、さして誇るに足ることではないのでなからうか。私はよく反省して見る必要がある。これだけ當代一流の佛教界の名士を招いて、しかも毎月新聞に廣告しても、なおかつ、聴講者が集らないとすれば、これは佛教にとつて大變な問題ではないかと思うのである。決して自惚れてはならない。それが當然なことなのだ。

現代の人々は、佛教の講演にあまり耳を傾けようとしなない、純正な佛教に對して、現代人の關心が極めて薄くなつてゐると、一般に考えられている。しかし、さらに歸つて考えれば、現代人が佛教に

無關心だということは、決して佛教の本質に関わることではないのではなからうか。佛教という既成概念に捉われて、佛教の容器いれぶちともいふべき、教義や教團、或は寺院、僧侶の在り方について、それが時代遅れだと考えているのではないのか。そのような、容れもの如くに係らず、つねに、われわれに眞實な生き方を教示しているのが佛教だとおもう。あえて、「佛教」と呼ばなくともよい。そのような眞實の生き方について、誰れ一人として、無關心で居られよう筈がないではないか。

中山文化研究所の宗教講座には、既成概念で考えられているような、佛教的な道具立てが何もないのである。また、その組織上から考えても、宗教法人でもなければ、新たな宗教團體でもない。組織的な運動體となることを目標としないから、會員の募集もしないし何らの會費もとらない。來る者は拒まず去る者は追わず、宗派、階級、年齢その他一切の資格を問わない全くの自由聴講制度である。小野所長がよく言われることであるが「鳥飛んでその跡を残さず」という境地である。佛教信者を獲得することでもないし、ましてや太陽堂のファンを作ることが目的でもない。いうならば「求めざる佛教」である。そのような無所得の講座に、多額の費用を支出して委かされる中山太一氏の尊い信念には深く感謝しなければならぬとおもう。

如何にして現代の人々に、佛教の眞實を理解味得して頂くか、尊い佛教の眞實が、少しでも現代の社會に生かされるようにということが、所長始めわれわれの念願である。毎月の講師や講題の決定に

並々ならぬ苦心が拂われていることは勿論であるが、出来るだけ講師には話し易い様に、聴講者には聴き易い様にと、所員皆が心掛けている。それが、われわれの佛道實踐に繋がることだと思つてゐる。

講師のお話しも眞剣である。「中山では月並なお話しは出来ないから」とよく講師の先生方から言われる。聴講者の態度も極めて熱心である。そこに自ら、眞摯な會場の雰囲気を感じ出すわけである。講師の眞剣な氣持が聴衆に映ずる。聴衆の熱心な態度が、講師の話にさらに熱を加える。主催者はいよいよ眞剣ならざるを得ない。それは主客一體の境地である。すべてが「衆力和合」であるとおもう。誰れの手柄でもない。これひとえに、佛法のお蔭である。

中山の宗教講座が盛況だという理由を、強いて言うならば、そのようなことが、自然講座全體に反映しているのであるか。現代人が佛教に無關心だということは、多くは、既成佛教の寺院、僧侶の在り方が、職業化されていることに對する不満の現れと言つてもよい様である。「佛教の話しは聞き度いが、どうも寺に行く氣になれない」という述懐をよく耳にする。青年達のそういう言葉の中に、案外眞實な意味が含まれている。現代の人々は佛教を求めているのである。それを近づけ得ないものが、何か寺院、僧侶の在り方に中にひそんでいるのではあるまいか。

三

現代人に佛教を語る場合に、純粹な佛教の思想や信仰を、如何に

文化的に表現するかということが、忘れられてはならない。ことに若い世代の近代的意識には、文化的要素が加わっていることが、非常な魅力を感じるものであるらしい。元來、佛教は非常に強い文化創造の力をもつた宗教である。我が國に渡來當初より、佛教が、それぞれの時代の文化の擔い手であつたことは、いまさら、説明を要しないであらう。それが現代において、文化創造の力を發揮し得ないということは、われわれ佛教者の怠慢でもあらうが、別に大きな問題として考えて見なければならぬ事柄である。とにかく、その點において佛教がキリスト教に劣ることは、残念乍ら認めざるを得ない。そういう不満が、無意識の中に現代人の佛教觀に含まれているのではなからうか。

同じく、佛教講座でも、文化研究所の主催する宗教文化講座と呼ばれると、何となく近代的な感覺を受取る様である。中山文化研究所の文化講座が、宗教講座と婦人講座(實際は婦人に限つていない)の二つになつてゐることに、大きな意味がある。廣い意味で人間の生活文化を離れたところに、佛教の意義はないと思うのである。

文化的要素として最も必要なものの一つは音樂である。講座の前後に行われる、宗教曲の奏樂、讀佛歌の合唱が、ただけ參會者の宗教的感情を昂めることが、計り知れないものがある。それについて感ずることであるが、聽講者の中で特に佛教信者と目されてゐる、いわゆる同行方の中に奏樂中の態度の悪い人が多いのはどうしたことであらうか。私語、雜談、あだかも音樂には用がないといった感じである。他人の迷惑も考えず友人の爲に座を占領して知らぬ

顔、そして講演中には多くは居眠りである。これが佛教信者といわれる人の態度だとすると考えざるを得ないのである。そこに問題はいろいろあらう。

最後に申添えておきたいことは、いかに佛教講演會が盛況であらうとも、それだけで、佛教の信仰にはならないということである。信仰の問題は、個人個人の眞剣な命がけの問題である。そこに宗教文化講座や、佛教講座の限界があることを承知せねばならない。信仰の世界においては、あくまで道は一すじである。求められているものは文化でもなければ思想でもない。ひたすら聖者の教え示された道を信じ行じて行く、そこにギリギリ結着の宗教の世界がある。

中山文化研究所が、所主の念願によつて、特別に親鸞研究講座を開催していることも、この信仰體驗を重んずるが故である。あくまで親鸞の信仰一すじである。しかし、一すじの道を歩むことによつて、また、他の多くの道が目的地に通じていることを了解しうるのである。我が道を謙虛に歩み行くと共に、他の道の尊きことを理解し合うことが出来る。そこに佛教の精神がある。我が佛尊し、我が道賢しとするところに宗教心が生ずる。宗教の名において、對立が生じ、争いが生ずる。現代人の佛教は、宗教心を超え行くものであらねばならないと信ずる。

私は中山文化研究所の宗教講座を司會しつつ、そのようなことを感じさせられている。

いけ花の制作と観賞 (Ⅱ)

(観賞) 上 田 純 明

(制作) 上 田 理 和

一 美しいという意味

美しいものに憧れるということは本能で

す。人間にこういう本能があるということは考えて見ると不思議なことです。どうしても人間は美しいものに憧れるのでしよう。生命の求める聲に耳を傾けて見ましょう。やつぱり美しいものに觸れると、生命がよみがえるように生き生きとして來ます。どうしてもでしよう。「美しき」という言葉の意味を分析しますと、自然とその理由を説明しているように感じられます。

日本語の「うつくしい」という言葉の内容には、三つの意味がからみ合っています。第一には、慈しむ(いつくしむ)という意味です。

慈しみの温かさが感じられるもの、それが美しいのです。慈悲の慈です。慈は大いなるもの、高きものが、小さきもの、あわれなるもの、低きものへの憐れみから、愛の涙で引上げよう、救わうという力のふりかゝる場合です。その力に感應して手をさしのべる心、求める心、それが「悲」なのです。慈愛と悲願との魂の交流は生命の世界に於て、まことに美事な姿に違いありません。いつくしむ姿、そこに「いつくしき——うつくしき」姿があるのです。

草木の葉をよく見て下さい。弱そうに見えても活きているものは、表を上を開いて陽光を精一杯受けようとする力が見えます。バラの花蕾のふくやかな温かさ、桔梗の蕾の玉のような浮彫、觸るれば音を立て、開かんとする水蓮の蕾、その陽光と、その水の光と、その生命の営みと、考えればみな慈しみ多き世界の悲願の姿です。そこに私達の魂が呼び覺まされるのでしよう。呼び覺まされた時にあゝ美しと感じ、救われるような清々しさに浸るのです。

第二は「嚴しき」もの——嚴島の嚴です。この場合には嚴肅の姿です。冗談や遊びごとや、緩んだ心には「嚴しさ」がありません。「蔓もどき」の枝先でも活きている場合は、ぶらりと垂れたまゝではない。

萩・山吹・雪柳・小手毬のあの弱々しい枝のうねりも、生きている限りの強さが感じられます。この姿の純粹さの嚴肅に私達は打たれます。男は男ながらに、女は女ながらに、私達もそんな純粹のいのちの営みに立ち歸りたいものです。花に觸れる心というのは、常にそういう感動です。

第三には「齋きまつる」という昔風の言葉にある、あの清らかな心の恭々しい姿です。いつき祀る心、それが「うつくしき」心なのです。——「路ばたに何やらゆかしすみれ哉」——うつかりすると踏みつぶされそうな野董のいじらしさ、誰がために咲き初めしと問う由もなく、ひたすらに生命の営みをつとけて大地の精霊に祈っているではありませんか。

二 いけ花の美について

いけ花は藝術です。藝術である限り創造なのです。自然の模写ではありません。然し人間が藝術としてのいけ花を創る以前に、既に造花の神によつて、一個の生命體としての草木が創られていることを忘れてはいけません。いけ花の心の肝腎なところはこゝです。忘れなければきつと藝術家は敬虔で眞摯な態度となります。美の出發はこゝから始まるのです。

ところで生命が活きているということとは、呼吸している現在だけでなしに、そのいのちの過去と、現在に連る未來との純粋性が續く限り、それは無限の擴がりを持つているということ、花の心に觸れた人、或は觸れよ

うと心がける人は、自ら體驗で得られる叡智で知ります。理窟ではありません。こゝに藝術の古典と新しさとの矛盾のない永遠性が具現出来るのです。その時それは流行花でもあ

りません、模倣花でもありません。唯、美しきものとしての永遠の生命なのです。ちよつとでよいから、俗耳洗つてその美しさに觸れて見ましよう。

◇古流新花型の生花（毎日新聞、五月二十九日（土）夕刊所載）

生花の世界もアバンギャルド（前衛派）が幅をきかしている……とひとくちにいつても、それを解明すれば、生花もまた藝術としての創作に向い、自然を離れて造型的な美を創り出そうとしているからだともいえるでしょう。この寫眞は五月廿日まで東京日本橋高島屋で開かれていた「古流生花展」（家元・池田理英氏、後援・主婦の友社）の中から拾つた古流新花型の生花です（制作者、古流顧問上田理和氏）。花材は黒塗の藤づると金網です。いわゆる「お流儀花」の構成法ともいえる天・地・人の三原則の傳統の中にアバンギャルドの感覺を生かしたもので、花材の新しさと、私たちの生活との距離は確かにあるのですが感覺的には遠くならず受け止めて觀賞出来ることは、この生花の基盤となつてゐる古い歴史のかもしれない出す力なのでしよう。



みほとけさま

静かに (♩=50位)

佐藤 良智 作詩
松 清 基 作曲

みほとけ さまの おんまえ で きちんと

すわって おがみま はう よいこの よいこの

わたしたち みほとけ さまよ まもりませ

釋尊物語 (四)

文學博士

山崎 宏



八、偉大な釋迦の説教

釋迦は、實に説教が巧みであつた。いや巧みであるというよりも眞實であり、何物にもこびず、恐れず、大膽であつた。それは説法とゆうが、口で言葉で説くのではなかつた。時にそれは、身も心も打ちこんだものとなつた。それは實に、魂と魂のふれ合う説教であ

つたのである。それに釋迦は、人によつて色いろ教化の仕方をかえよくその實効をあげた。次ぎに、二三その例を示そう。

——鬼子母——

釋迦が説教のため、方方を歩いている中に、人の子を盗んで食う女がいるという話を聞いた。その名は鬼子母といわれたが、本當に子供を養うたのか、人の子をさらつて他所に賣つたものか、よくわからないが、鬼子母の夫が、地方の有力者であつたので、人びとはただなげき悲しむだけであつたとゆう。

釋迦はこの話を聞いて、何とかして鬼子母を、改心させようと考へた。ところで、鬼子母には、ビンガラという一番末の娘がいた。

釋迦は鬼子母が、ビンガラを最もかわいがつてゐるのを知り、弟子に命じてそつとビンガラを、つれて來させた。

鬼子母は、いつものように、人の子をさらつて、家に歸つて見ると、かわいいビンガラがいない。鬼子母は、氣狂いのようになつて、^飯ご飯も食へずに、

「ビンガラがいない。ビンガラがいない。ビンガラをどこかで見なかつたか。」

と、さがしまわつてゐた。釋迦は、鬼子母がもう十日もさがし廻つて、^と途方にくれてゐるのを知ると、鬼子母のところに行つて、

「お前は、そんなにビンガラが、かわいいのかね。」

と、何氣なくたずねた。

「いえ、かわいいの何んのつて、あんなかわいい子は、ありませんよ。それを誰が、ぬすんだのだ。ほんとに……」

「そうだ、鬼子母よ、ビンガラは誰かにぬすまれたのだ。……」

だがお前、おはぬまれた時に、いつたい何をしていたのか。」

釋迦の質問、は柔かい中に、ごまかしを許さぬ、鋭いものがあつた。鬼子母の顔は、見る見る中に、眞青になつた。釋迦に見抜かれたのだ。身をふるわした鬼子母は、ばつたり釋迦の足もとに伏し、心から禮拜して罪をわびた。しかし、釋迦はなお力強くいつた。

「恐ろしい罪だ。お前の罪は、つぎつぎにお前の子を、お前の手から奪い取るであらう。」

と。鬼子母はここで、全く極惡の罪にふるえ上り、ただ釋迦に救いをもとめるだけであつた。その時、釋迦は初めて、おごそかに

「それならばお前は、これから人を殺したり、盗んだり、うそを言つたり、みだらなことをしたり、酒を飲んだりしてはいけない。この五戒が守れるか。守れるならば、すぐにビンガラをよんで、會わせてやろう。」

といつた。鬼子母は、それを堅く誓つた。釋迦はビンガラをよんだ。鬼子母は、かわいいビンガラを抱き、泣いてよろこんだ。そして今までの罪ほろぼしに、多くの子供を、かわいがつて育てたので、後に子供の守り神としてしたわれ、鬼子母神として祭られるようになったのである。

—— 荒野のヤシヤ ——

インドのある國に、アーラバカとゆう王があつた。その王は武勇にすぐれ、狩を好んだ。一日かれは、鹿を追つて家來とはなれてしまつた。夢中になつて、ようやく射とめた鹿をかつぎ、獨りでつかれた足を、ひきずりながら歸つた。その途中、荒野にそびえる一本の大木の下まで何ると、ヤシヤという恐ろしい鬼が出て來た。ヤシ

ヤは、神様からこの木のかげに入つたものなら、何でも食べようといふ許しを得ているといい、今にも王を食べようとした。王は驚いて苦しまぎれに、

「どうか今、私を食べるのば許してくれ。その代りに、私は毎日一人の人間と、一鍋の食物をお前にやる。もしそれが實行出來なかつた時には、この私を食べてもよからう。」

といい、その場をのがれて歸つた。

しかし王は、歸つてから、困つた約束をして來たことを後悔し、そつと門番と相談して、先づ死刑にきまつた罪人を、一人つつ毎日ヤシヤに與えることにした。その日から、門番は王の命令によつてろりやに行き、死刑に當る罪人をよび出し、鍋に食物を入れ、ヤシヤのいる木の下まで、それを運ばせた。こうして一日一日と、罪人に減つて行つた。が、どこからともなく、

「近ごろ、王様は盜賊をとらえて、ヤシヤにやるそうだ。」

という評判が立ち、人びとは恐れ、おかげで泥棒はいなくなつた。しかし王様は、こまつた。何とか泥棒をつくらねばならぬので、わざと自分で錢を路に落し、誰か慾張つて取つてくれと願つたが、だれも手を出すものさえなかつた。

いよいよ困つた王は、大臣に相談した。老人はどうせ死ぬのだから、各家より一人つつ毎日出そう、というものもあつたが、反對があつてやめ、赤ん坊なら、ものも言わないから、よからうとゆうことになつた。ところが、國中の母親は、これを聞いて、大いそぎで赤ん坊を、となり國に疎開させてしまつた。そのため、國中で残つているのは、王様の赤ん坊一人となつた。仕方がないので、それを明日ヤシヤに食べさせよう、とゆうことになつた。

釋迦はこの話を、人傳てに聞いたので、その日、祇園精舎の大香室から出て、ヤシャの住んでいる荒野に、ただ獨り出かけた。行つて見ると、番人がいたので、ここに一晚泊めてくれるように、申込むと、番人は

「ヤシャは亂暴で、自分の父も母も、またお坊さんでも問題にしません。人の心ぞうを裂き、あしをちぎつて、海のかなたに投げとばす始末ですから……」

と、いつて止めた。この話をしていると、ヤシャがやつて來た。見ると自分の座敷に一人の坊さんがいる。ヤシャは氣違ひのように怒つて、どなりつけた。「坊主、出て行け」

釋迦は、よしと言つて出た。すると今度は「坊主、はいつて來い」と、どなつた。釋迦はおとなしく入つた。ヤシャは、くるつたように、三度これをくり返した。四度目になると、釋迦は何といつても動かなかつた。落ちついた様子、澄み切つた目、やさしい口もと。さすがのヤシャも、氣が靜まるにつれて、少し氣味が悪くなつたらしい。そこで、釋迦はいつた。

「どうした、ヤシャ、やることがあつたら、遠慮なくやれ、」

こうなつたら、ヤシャの負けであるが、それでもヤシャは、元氣を出して

「それでは聞くぞ。いいか、これに答えられなかつたら、お前の心ぞうをさき、あしをガンヂス河の彼方に、投げつけてやるぞ。」

と、叫んで見たが、その質問は、もう釋迦の思うつぽに、はまつていたのである。

「いいか、人間の一番大切な寶はなにか。どうしたら安樂にな

れるか。何が一番うまいか」全くしどろもどろの質問である。「よろしい。人間の最上の寶は信仰だ。佛法によれば、間違ひなく安樂になれる。それから、眞理こそ最上の甘味だ……」

釋迦は、靜かに、あわれむように、次つぎと教えて行つた。この世の無常な話、恐ろしい罪のむくいのこと、まざまざと、そこに話し出されて行くにつれ、ヤシャは次第に首を垂れ、もう聞く元氣もなくなつたらしく、「いや、悪かつた。私はこれから、佛さまの法を信じ、修行のため、村村を廻り、都に参りましょう。」と、力なくいつた。

この時、アーラバカ王が、悲しげにわが子を抱いて、とぼとぼとヤシャのところに着いた。そして王は泣く泣く、かわいい赤ん坊をヤシャの手に渡した。ところがヤシャは、それを黙つて釋迦に渡した。王は驚いた。釋迦は驚く王に、その赤坊を渡してやつた。これから、アーラバカ王も、ヤシャも、皆よい佛教信者になつたことはゆうまでもない。

——殺人鬼アングリマーラ——

舍衛城に、よく出来るバラモンの學者がいた。弟子は五百人もいたが、その中の一番弟子に、アングリマーラという青年があつた。

かれは、學問も、辯舌も、武藝もすぐれ、またすがたの美しい青年であつた。そしてかれは、何時も師の説をそのまま信じ、決してその教に背かなかつた。ところが、不幸にも、このようなことが、却つてかれを、恐るべき殺人鬼とするものになつたのである。

それは、話にくいことであるが、ある日、この青年の美しさに師の夫人が迷つて、色いろといい寄つた。まじめな青年であるかれ

は、あくまでそれを不道德として、ことわつたのである。そうなる
と、師の夫人は、自分の善くない行^{せむい}が、この青年から主人にもれ
るかも知れないと考え、却つてアングリマーラが、自分に善くない
亂暴をしたといつて、着物や帶^{おび}を破つて、泣きなが主人にうつたえ
た。

そこでバラモンの先生は、怒つて見たが、どうも本當かどうかも、
わからないし、下手^{へた}をすると、やりこめられそうなので、アングリ
マーラが、何でも自分の教に従うのを利用して、巧みに殺人をすす
め、死刑になることを望^ぞんだ。

「君はこの頃、實に立派な人になつた。だが、一つ足りないこ
とがある。それは、もつと武勇にすぐれ、百人の人を殺し、一
人から一本の指を切り取つて、それを飾とすることである。」

この話を聞いて、アングリマーラは驚いたが、師の説には従わねば
ならぬと考えて、長い劍を持ち、四辻^{よつ}に出て、氣ちがいのようにな
つて、来る人来る人を、切りまくつた。

このことは、すぐに町々に傳わり、やがて釋迦の耳にも入つた。
そこで、釋迦も困^{まど}つたことだと思つて、アングリマーラが、あばれ
ているという四辻^{よつ}の方に行つて見た。近くに來ると、附近の人は皆
で、あぶないから通れないといつて、前に行くことを止めた。しか
し、釋迦は唯一人、平氣な顔をして進んで行つた。その時、もう一
人だけ進んで行くものがあつた。それは、この青年の母であつた。
母はわが子のことを思い、お腹^{はら}がすいたろうから、といつて食事を
持つて來たのである。

血に狂つたアングリマーラは、先づ母を見た。かれは血まみれの
長劍をふるつて、母の首を切りおとそうとした。ところが、振りか

ぶつた劍の向うに、ふと釋迦が来る姿が目に入つた。この時、ア
ングリマーラは、もう九十九人の人を殺したのであつた。あと一人
だと考えると、彼は急に母を見すてて、釋迦の方に走つて行つた。
見ると、くびから生ぐさい血を浴びた物すごい殺人鬼の姿だ。

だが、この殺人鬼を前にして、釋迦は平然として立つたままであ
る。それなのに、アングリマーラは、懸命に走つたつもりだが、少
しも釋迦に近ずけなかつた。青年はとうとう、息苦しくなつて、叫
んだ。「おうい。坊さん、止まれ、止まれ……」

釋迦は、笑つて答えた。「私は止まつている。お前こそ止まつてい
ないのだ。」頭がよいとゆう評判のアングリマーラも、こうなつて
は、わけが分らぬ。何んだか、心の根もとから、ぐらついて來た。

「それは、わからん。どうしてだ。」

意氣^{いけ}地なく聞きかえした青年の心は、もう釋迦につかまれていたの
だ。そこで釋迦は、生物を殺そうとする心を、捨てた人の心は、し
つかりと止まつて居り、それに反して、殺そうという氣のあるもの
は、心が不安で、止まることが出來ないのだ、と一言一句力をこめ
て、はつきりと教えた。話がここまで來ると、アングリマーラは、
流石^{さすが}に秀才であつた。かれは、直ちに劍をすてて、釋迦の足もとに
ひれ伏し、自分の大罪を許して、弟子にして頂きたいと願つた。

この頃、國王のバセーナチ王は、市民からの急の訴^{うたが}によつて、
大殺人鬼アングリマーラを討伐する軍隊を向けた。大げさなことだ
が、一小隊ぐらいは、どうしても必要と考えたのだらう。それに、
王自身もついて行くという話で、軍隊はすぐ出かけ、途中に祇園精
舎に立寄つた。その時ちようど、釋迦がいたので、王は早速この話
をすると、釋迦は笑つて一人の立派な青年僧を招き、

「これが、あの殺人鬼の出家姿ですよ。」

と、王に紹介した。これには、王もびつくりした。一時にぞうつと寒気がした、といわれているが、無理もない。自分の軍隊をかえり見て、全く王は、あきれた。そして、つくづく釋迦の教の偉大なのに、感嘆しないでは、居られなかつた。

——大馬鹿のハンドク——

釋迦の弟子に、ハンドクとゆう頭のめぐりのよくない男がいた。

釋迦は、この男をアーナンドに仕込ませたが、何を教えても、きれいに忘れるので、皆もあきれて、大馬鹿のハンドクとよぶようになった。

とても駄目だ、とゆう話を聞いて、釋迦がそれなら、自分が一つ教えて見よう、とゆうことになり、「ちりを拂い、あかをとろう。」という文句を教えて見たが、やはり忘れてしまつた。お釋迦さまでも、やつぱり駄目だ、と皆で笑つたが、釋迦はあきらめず、今度は僧たちのはき物の掃除をさせた。ハンドクは馬鹿正直な男であつたから、一生けんめいに、はき物をきれいにして歩いた。すると、僧たちも、だんだん氣の毒になつて、何時も、ちりを拂い、あかを取ろうとゆう文句を教えた。

仕事と文句が一致していたので、いくら馬鹿のハンドクでも、今度はすつかり文句を覺えた。いや、それだけでなく、ちりとあかとは、はき物だけでなく、心にもあることを知つた。ハンドクは、頭は悪かつたが、ついに覺つたのだ。ハンドクはよろこんだ。そして心から釋迦に禮拜し、それから、ますます一生けんめいになつて、はき物をふいて廻つた。

——張りすぎた琴の糸——

本名はわからないが、聞二百億とよばれた若者があつた。よほど大金持の息子であつたらしく、かわいがられていたが、はだして土をふんだことがなく、足の裏に長い毛が生えていたというお坊ちやんであつた。この若者が、釋迦のお説教を聞いてから、夢中になり是が非でもといつて、両親の反對をおし切り、出家して釋迦の弟子になつた。

何しろ、今までの生活がぜいたくだつたので、少しばかりの修行でも、手足の皮がやぶれて、血が流れ出るという始末で、そばで見ているとも悲そうな姿であつた。しかし、かれは今の言葉でいえば、お釋迦さまファンなので、えらく熱心なものだつたが、どうしたのか、一向に覺れそうもなかつた。釋迦はこれを見て、聞二百億が家にあつた頃、よく琴をひいたという話を思い出して、

「聞二百億よ。お前は琴をひいて、よく知つてゐるだろうが、琴は糸が強すぎても、ゆるすぎても、よい音は出ないものだ。修行もこれと變りはない。今お前は、あまり心を張りすぎているいかな。」

と、かれが餘り焦つてゐることをほのめかした。これが聞二百億の心に、びつたりとあてはまつた。かれは、これではつと氣ずいた。

「そりだつた。あれだ。強からず、ゆるからず、焦らず、怠らずに精進するところに、本當の覺の妙音がひびくのだ。」

と。これから間もなく、彼もついに覺を得たので、仲間のものも、ほつとした。

調馬師ちようばし

ある日、馬をならす調馬師の名人が、釋迦をたずねて來た。心靜かなこと時だつたので、二人の會話は、のんびりしていたが、ふと釋迦が聞いた。そして問答が續けられた。

「馬を馴なすのに、どんな法があるかね。」「そうだね。やわらかくやるのと、つよくやるのと、やわらかくよくやるのとの、三つでしようね。」「そうかな。この三つの方法で、うまく行かぬ馬は、どうするかね。」

「殺すより仕方がありませんなあ。……そこで一つ、私からお聞きしますが、お釋迦さまは、人間をどうして馴ならしますかね。」

「私もお前と同じで、三つの方法しか持ち合せがないよ。」

調馬師は、すこぶる得意になつた。そして

「それで駄目な人間は、どういたしますかな。」

と、急いで聞いた。釋迦は平氣で、「ああ、殺すよ。」

といった。調馬師は意外の言葉にびつくりして、聞き直した。

「殺すのですか、お釋迦さまが、本當に。」

ここらあたりが、釋迦の説教の妙味なのだ。荒つぽい馬方うまかたには、荒つぽく行くのである。融通のきかぬ小人物では、目がまいそうな言葉である。調馬師と釋迦とは、段ちがいであるが、それをよくみちびいて來たのである。ここで釋迦は、さらに言葉をつづけた。

「私は、もとより殺生を禁じてある。しかし、どうしても馴ならすことの出来ぬものには教えない。自分が教えないということ、は、殺すのと同じことだ。」

この言葉には、釋迦の強い自信がひそんでいた。調馬師は、すつか

り釋迦の説教に、ひきつけられて、殺されては大へんだ、とゆうので早速信者になつて、馬を殺すことも止めたという。

汲取り屋のニダイくみと

舍衛城に、貧乏なニダイとゆう便所の汲取り男がいた。その頃、インドでは、こうゆうものを、土びんの大きなもので汲んだらしい。ニダイは今日も、大小便をびんに汲みこんで、城外にはこんでいた。丁度その時、向うから釋迦がアーナンダをつれて、城内に歸るのに會つた。ニダイは、こんな仕事をしていたが、感心な男で、何時も釋迦をしたつていたので、もしもお釋迦さまを汚しては、いけないと思つて、あわてて道をさけようとしたとたんに、物につき當つてびんの中のくそ汁くそじゆを、體ぢゆうに浴びてしまつた。くさいにおいがする。ニダイは、ただかしこまつて、おろおろと手を合せた。

釋迦は前から、この男の人となりを知つていたので、やさしく

「ニダイよ。心配するな。お前も出家したくないか。」

と、聲をかけた。ニダイは、まさか自分の名など、お釋迦さまが知つて居られようとは、考えてもいなかったもので、びつくりした。その上、自分など夢にも、かなわぬと思つていた出家を、すすめられたので、うれしさがわき上つた。

「はい。有りがとう存じます。でも、いやしい私など、どうして出家が出来ましょう。」

「いや、そんなことはない。バラモンの教なら、そうかも知らぬが、佛の法は大海のようなものだ。貴賊も貧富も別はない。あらゆるものを含んで、そして皆を清めるのだよ。」

と、こういつて、釋迦は、きまり悪るがるニダイを、むりに河岸につれ、身を清めてから、祇園精舎につれて行つたのである。

芝園だより

○やつと潜り抜けた梅雨の空。夏が来れば爽秋が待たれる。人間は何故にこのように、先をばかり急ぐのか知らん。とはいふものの、雑誌編集の悲しさは、人よりも二ヶ月も三ヶ月も先を考え、そのみに追われている。本誌も本月で常道に復する約束にあるのだが、果してそうなれば、編集の悲しさは更に深まる。

○大野先生の光明寺蓮住は、本誌と先生との因縁から言つても慶賀すべきである。本誌関係の中から續々と偉彩の發揮されることは無條件に喜ばしい。

○本月號の企畫は他誌に見られぬ體裁で、お盆施本の見本を兼ねています。どうか御熟覽の上、どしどし御註文あらんことを。

○良智先生の明照幼稚園またまた増築。この調子で行くと、お寺の中に幼稚園があるのではなく、幼稚園の中にお寺があることになる

これも寺院の新しい型。(竹中)

○近日、畏友赤尾敏弘氏から、舊師小笠原秀實先生(谷大教授)の筆蹟一幅を頂いた。

「小さい花の名は知らず

みどりの草の名も知らず

心の野べのさまよひに

たゞに見てのみはてを行く

消ゆる命の名なればか

咲く幻の影故か

心の野べのさまよひに

見るはさやけさ美はしさ

………

靜かに歩んで來られた先生の道

が、ほのかに見えて、心温まる。

盆のおくりものまでに。

○餘り名も知らぬグアテマラとか

言う所で戦いが始まつた。二つの

世界は、ここでも争そい始めた。

何と世界は狭くなつたと思うと

もに、何故に、こうまでケンカ好

きなんだと怒鳴つてやりたい。

(安居)

○本號で發行日通りとなりまし

た。今後内容とともに、會員各位

の期待に副つて發展させて参りた

いと存じます。

○本號執筆の先生方を紹介します

と、幸田女史は五月號で御紹介済

みですが、幸田露伴先生の御息女

で、「こんなこと」等隨筆で文壇に

活躍されております。芳賀先生は

教育大助教授、東山文化の専攻村

岡女史は、評論家として皆さんお

なじみで、又、教文館から出てい

るキリスト教關係のニユウエイジ

の編輯長で、キリスト者であり

なのですが、お互の宗教を理解し

合つていこうといふお心が、いつ

も感じられる方です。雲藤氏は中

山文化で活躍、宗教學を専攻され

てゐます。上田先生は大正大學國

文學講師、御忙しい中麗文を頂き

ました。山田先生は、魚籃幼稚園

長、保育童話界に重きをなしてお

られます。山崎先生は東洋史關係

で有名な方。鶴田氏は佛教作家と

して既に達筆を何度か煩はせた。

○新保義道氏より六月號特輯向の

ものが届いたのですがメ切後のた

め残念乍見合せました。

○業務の手違ひから、一部の方に

大部遅れて前金切りの通知が前號

々計面の事情御察し下され、折返し御送金願ひます。	
○業務に此程沖田君が入りました。よろしく。	
○會員の方の御投稿が茲少しありませんが、奮つて、何でも編輯部宛御送り下さい。	
○八月號の暑中見舞廣告には會員各位の御参加をお待ちします。	
(龍海)	
誌代 會費半々年二百圓、一年四百圓(下共)。毎號定價三十圓(下共)。前金切次第清算通知申上げます。確實便利な振替を利用して下さい。	
「淨土」 七月號	
昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可	
昭和廿九年 六月廿五日印刷	
昭和廿九年 七月一日發行	
(定價三十圓)	
編輯兼 眞野正順	發行人 眞野正順
印刷所 共立社印刷所	發行所 法然上人鑽仰會
東京都千代田區神田保町一〇	
東京都港區芝公園五ノ一〇	
電話 芝(四三)一三二八	

お盆の施本

特別普及版浄土七月號

お盆のしおり

一、體裁……本誌八頁分、表紙付、A5版
 二、内容……七月號第一頁より第八頁まで八頁
 三、紙……本誌表紙と同質紙、特に純施本用として表紙は「お盆のしおり」の文字印刷、裏におせがきの案内欄を設く、見返し表紙印刷なし。

一、發行……六月二十八日
 二、頒行……
 一部六圓、五十以上五圓五十錢、百以上五圓、送料四部八圓、百以上五十圓、二百以上無料

信徒必携一枚起請文

B六、十六頁 價十圓送八圓
 五十部以上 一割引
 百部以上 二割引

浄土暑中見舞廣告

一、八月號に誌上暑中見舞を致します
 二、申込……ハガキに御住所芳名明記、(肩書希望は十字前後)
 三、參加費……一名三〇〇圓、一團體五〇〇圓
 四、切……七月十日
 五、申込先……東京都港區芝公園五ノ十
 法然上人鑽仰會・廣告係

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一圓一日發行)
 昭和二十九年六月二十五日印刷 昭和二十九年七月一日發行

第二十卷

七月號

幼稚園 運動遊具

全國幼稚園・保育園・小學校・各團體に、良品を廉價にのモットで、堅牢安全な遊具を納入好評を頂いております。松管・光明・芝等の浄土宗幼稚園採用。



篠澤鐵工所

東京都大田區堤方町718
 電(75)1024(池上驛東3分)

鑽ブランコ2人乗	¥ 12,000
鑽ブランコ3人乗	¥ 14,000
鑽ブランコ4人乗	¥ 22,000
鑽ブランコ6人乗	¥ 26,000
椅子ブランコ4人掛	¥ 13,500
太鼓橋	¥ 10,000
ジャングルジム中型	¥ 28,000
單式滑臺中型	¥ 23,000
復式滑臺中型	¥ 36,500
動物付き遊動木	¥ 30,000

此他各種、一報力タログ送

配達實費(都内横濱500圓以内
 其他1000圓以内)組立無料。
 小田原・熊谷・土浦以遠は丸通
 送り、(荷造費當社・送料着拂)
 組立説明書送付

定價金三拾圓(送料別)